日蓮聖人門連だより

発　行
日蓮聖人門下連合会
東京都大田区池上1-32-15
〒146 電話(03)751-7181

昭和62年２月16日
第３号

日蓮聖人の理想を実現するために

各地に門下連合会を

前京都日蓮聖人門下連合会理事長
吉永正晴

日蓮大聖人第七百遠忌を迎えて門下連合会主催の四大事業、日蓮聖人劇、日蓮聖人展、青年の船、オラトリオが盛大に実施されたことは、私達門下の者にとって誠に慶び一入深く感激極めて大きく未だに脳裏に強く残っています。大聖人への鴻恩報謝の一分にといえば自己満足のそしりを免れませんが、一天四海皆帰妙法広宣流布のため大衆動員を益々活潑にしなければと痛感いたします。そのためにも祖廟に帰一する門下連合会の前進拡充を真剣に考える必要があると思います。

この四大事業を、就中青年の船を契機として門下の青年組織を確立しようという希望が高まり要望が出され、数度の理事会に於ける検討が加えられながら遂に日の目を見ないで終りました。誠に残念ながら率直に言って経費負担の過重に対する危惧があったのではないでしょうか。

門下連合会の目的「日蓮聖人の理想を実現する」とは取りもなおさず一天四海皆帰妙法です。その為に御遠忌記念事業も高く評価され意義一入深いと言えるのですが、その費用負担が加盟宗派に相当重かったことは否めません。幸い各宗派とも同時期に御遠忌報恩事業を持ち特別予算を組むということで協力態勢をとることが出来ましたが、門下連合会に於いて時々この様な事業を行うことは困難でありましょう。

一昨年、創立二十五周年記念集会を京都大本山妙顕寺で開催の節の国柱会々長田中香浦先生の記念講演（門連だより創刊号所載）の次の言葉を思い出します。

「みのり豊かな発展のために経験をふまえて率直に問題点を指摘致しますならば、この日門連は

第一に、各宗団の限られたトップの集合であって、各宗団のあげての参加体制にはなっておらぬということ

第二に、したがってまた檀信徒を含んだ運動体でないこと

第三に、それゆえに全ご門下を動員する広宣流布の体制も組めず、その姿勢と意欲にも欠けるということ

であります。

誠に門連に対する痛烈な指摘であります。」

日常行事を通じた地域に於ける横の組織体を

要するに、縦の組織の集合体といえる今の形で、加盟各宗派の指令が下に向って出されても、末端に於いては何の横の連繋もなく、門下の異体同心水魚の交りといっても単なる言葉に過ぎないのです。日常に行事を通じて相携えて信徒を動員して行くには、地域に於ける横の組織体が必要でありましょう。各地に檀信徒や一般大衆を動員する組織ができ、縦横相俟って広宣流布の大運動を展開することができれば、門連の目的達成に向って大きな力となることは明らかであります。

昔から門下の地方組織として各地に大なり小なり聖祖門下連合会といった集りがあったと聞きます。然し消長はげしく組織の確立は仲々難しいようです。又各宗派の寺院配置に疎密偏在があり特殊事情ありで、何処に於いても揃って活動するということは不可能ですが、門連を軸として糾合すれば全国をカバーすることも可能です。その為の調査研究を門連で推進し、各宗派において地方に働きかけることが必要です。幸いにして発足にこぎつけることができたときは、当事者の努力が大事ですが一つ重要なことは行事の確立ということであると思います。

京都門連に於ける組織作りと行事の確立

門連発足以来、初めて昭和五十三年に地方門下組織として「京都日蓮聖人門下連合会」が加盟しました。行事の確立という点を中心として地方門下組織作りの御参考になればと思い、京都門連のことについて御紹介致します。

京都は現在も十六本山を擁する特殊な事情もありますが、会の組織運営等参考になる点は多々あると思います。先ず会則の目的、行事及び事業は次の通りです。

第三条　本会は、日蓮聖人の遺誡を奉じ、異体同心を旨とし、四海帰妙の実現に努力することを目的とする。

第四条　本会は、前条の目的を達成するため、下記の行事及び事業を行う。

一、降誕会、開宗会並びに御会式大法要

二、布教興学に関する事業

三、内外宗教人との交流

四、関係団体との提携

五、その他必要なる行事事業

そして会員は、本山会員（日蓮宗八本山法華宗側八本山）普通会員（住職担任教師）賛助会員。日蓮宗側の会員寺院は百二十二ヶ寺で、日蓮宗京都第一部宗務所に統轄され、宗務所長を代表として役員が出ます。法華宗側は会員寺院四十七ヶ寺で、各本山単位で一年交代で当番となり、当番本山の貫首が会長同執事長が委員長その他の本山執事長が委員となって運営する法華門流懇話会を組織しています。

門下連合会に於いては日蓮宗側と法華宗側が一年交代で表当番裏当番となり、日蓮宗側が表当番の年は日蓮宗八本山の会長貫首が門連会長、法華宗側当番貫首が副会長、宗務所長が理事長、法華宗側委員長が副理事長となり、翌年は表裏入替り正副が替ります。理事は日蓮宗側九名法華宗側八名、会計及び会計監査は夫夫各一名宛。右の陣容で運営に当ります。この外に若手の企画委員十数名があり、行事毎に企画を立てて理事長に出し、理事会で決定の上奉行委員の役課を依頼して実施に移ります。そしてこの行事や運営に要する費用は、本山会費（一山年額二万円）普通会員会費（年額三六〇〇円）賛助会費や助成金と行事毎の収入（各寺千円負担或は志納袋による信徒の志納、参加者の参加費等）に依って賄います。

昨年は法華宗側当番の年で、顕本法華宗総本山妙満寺貫首吉田日康猊下が会長となり小生が理事長となって年中行事を実施して参りました。京都門連には会則第四条により四つの年中行事があります。

一、降誕会――毎年初頭に総会を開き会務報告や決算予算の承認をしていましたが、会の目的からも信徒向けに行事をと、日蓮宗本山立本寺で降誕会を奉行し、貫首細井日苑猊下の法話を頂き、爾後年中行事の一つとなりました。

二、開宗会――比叡山大講堂の放火炎上によって日蓮大聖人の御尊像が焼失したため清澄より奉納されてから、日蓮宗々務院より京都宗務所への特別助成金を元にして京都門連に於いて開宗会を奉行し、大講堂須弥壇に大曼荼羅を掲げ御尊像を奉安して法味言上、続いて大聖人久修練行の横川定光院に参拝します。

三、夏期大学――法華宗真門流の僧籍のあった大阪大学名誉教授佐保田鶴治先生と、同じく僧籍のあった後に大阪弁護士会々長になられた赤鹿勇先生から、京都に門下の大学又は短大を作ってはとの提唱があり、取り敢えず勉強会でもということから夏期大学の構想が生れ、本能寺会館を会場として発足しました。

四、御会式――戦後、有志が相寄り聖祖門下連合会の名の下に合同御会式を始め、発展して東山の円山公園音楽堂で法要、続いて万灯提灯行列で四条通河原町通を経て本能寺に至るという盛大な行事になりました。然し車の増加により交通事故の危険が大となり、殊に老人の多い信徒に万一のことがあってはとの心配から夜の提灯行列を取り止めてきましたが、一昨年より昼間の万灯唱題行進に切替えて実施しています。

昭和六十一年実施しましたこの四大行事の要綱を記します。

一、降誕会（並びに総会）
二月十五日(土)於妙満寺
午前十時半より総会。同十一時半より法要（大導師・吉田日康猊下）。正午より法話（「御降誕の意義について」本法寺貫主・金山寛成猊下）。昼食供養の後散会。

二、開宗会　四月二十六日(土)
午前九時、本山頂妙寺出発。バス四台僧俗二百名、先発後発自家用車七台。同十時、叡山大講堂到着（須弥壇正面中央に大曼荼羅奉掲、清澄より奉納の大聖人尊像をその前に奉安）。講話「開宗会に思うこと」協議会副会長・奥田恵遠上人。法味言上（大導師・吉田日康猊下）。同十一時半、昼食・休憩。午後一時、横川定光院法味言上。同三時、妙満寺法味言上。同五時、頂妙寺にて解散。参加費は一人四千円。

三、夏期大学　於本能寺文化会館
八月二十七日(水)
午前九時、受付、開講式。同十時より十一時半まで「久遠の生命」（顕本法華宗管長・総本山妙満寺貫首・吉田日康猊下）。午後十二時半より二時まで「日蓮聖人の生死観」（立正大学教授・東京池上法養寺住職・小松邦彰先生）。同二時半より四時まで「科学と宗教―生存文化」（医学博士精神鑑定医・医療と宗教を考える会及び有終支援の会世話人・ト部文麿先生）。参加費、一名二千円（昼食共）。

四、御会式　十月四日(土)
午後一時、大本山本能寺集合。同一時十分、法味言上。同一時半、万灯唱題行進（本能寺―河原町三条―東山三条―仁王門通―寂光寺）。同三時、報恩法要（大導師・吉田日康猊下）。同三時半、法話（「不世出の日蓮聖人」立本寺貫首・細井日苑猊下）。同四時、清興琵琶「竜ノ口」木村蓮水先生。福引により参加信徒に本山貫首猊下染筆の色紙を授与。

京都門連の簡単な御紹介を終ります。一日も早く各地に門連組織が出来、全国的な四海帰妙の大展開のできることを心から祈ります。

昭和61年・合同御会式

従地涌出

✳人間にとり、精神世界を大きく意義あるものにするため欠かせないもの、それが信仰である。信仰ある人生とただ欲望充足のためにのんべんだらりと生を送るのとでは、同じ一生でも天地雲泥の差がある。

✳人間にとり必要な信仰だが、これは他でもない、簡単に神仏を信ずるという行為であり、別に難しい理屈はいらない。ただ信じつづけることに意義があるとすれば、たんに信ずるという出発点から、次の持続の世界に入るわけで、その道中過程にはさまざまな障害が起きてくる。その障害をのりこえるため、簡単に信ずる行為から、複雑な理屈も必要とされてくる。

✳複雑な理屈とは、学問をすることによりもたらされる。学問の裏づけが確立され、徹底して信解された状態の信は、何物にもまして強固なものとなる。信と学とは、このような相関関係をもち、たがいに影響し合っているのである。

✳日蓮聖人の宗教も、やはり同様の構造をもつ。聖人が信じられた法華経本門の世界、久遠実成の釈尊を信ずるため、出発は信に発するが、それを徹底させるため、学問の必要性が要求されている。したがって聖人門下たるもの、自己にむかい信の持続を命ずるためにも日夜の精進が求められる。

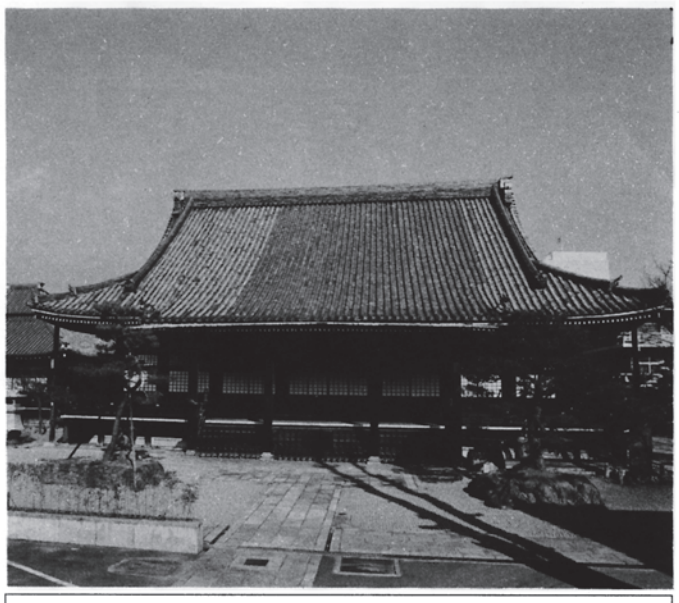
✳しかし、外典にもある通り、「少年老い易く学成り難し」（宋朱熹）である。「少壮努力せず老大徒に憂悲す」ともあるが、とにかく時の流れは早く、学問の道は遠く、かつ深い。万人に共通した世の常に囚われず、一日一日を進歩発展する生活を送らなければならない、その決意が強く求められる。日蓮聖人に同化し奉るためにも、地道な努力と精進を肝に銘じたい。（T）

シリーズ・門下御本山巡り 2

法華宗（真門流）総本山本隆寺

本勝迹劣・本果実証・事一念三千是好良薬の南無妙法

蓮華経を唱えられた日真上人開基の本隆寺を訪ねる



法華宗（真門流）総本山本隆寺
京都市上京区智恵光院通五辻上ル絞屋町
〒602　電話075(441)5762㈹
◎国鉄京都駅より市バス「衣笠」行今出川智恵光院下車。
◎「三条京阪」より市バス「山越」行今出川浄福寺下車。

日真上人により開かる■

室町時代の中頃、長亨年中（一四八七～一四八八）法華経本門・迹門の論争が頂点に達していた頃、開祖日真大和尚は妙本寺（現在の妙顕寺）の学室を出て、日像菩薩の旧跡、四条大宮に一宇を建立し慧光無量山本妙興隆寺と称した。教義の骨格は一部修行・本勝迹劣・唯壽量・本果実證・事一念三千是好良薬の南無妙法蓮華経で、これが当寺の創まりである。爾来五〇〇年を経過している。歴史としては天文五年（一五三六）に起った天文の法乱によって堂宇を失い、泉州堺に避難し、留まること六年、天文十一年（一五四二）の春、旧跡は幕府の収むるところとなった為に、杉若若狭守の邸跡の現在地を得て、再建。第四世本栖院日映上人の時のこと。

しかし乍ら、承應三年（一六五四）類焼により、本堂・祖師堂・庫裡・塔頭悉く焼失、時の貫主十世日遵上人は、法意日宣、妙福日政、木下権兵衛等の助力を得て、明暦二年春着工、翌年秋に竣工開堂。その後、享保十五年と天明八年の二度にわたり洛中を焼けつくす大火に見舞われたが、奇跡的に難をまぬがれ、今日に至っている。「爾来焼けずの寺」と称されている。この歴史的背景をもつ本堂・祖師堂の文化財的評価は高く昭和六十一年三月京都府文化財に指定された。その主任調査官をつとめられた関西大学永井規男教授の寄稿文を別掲し一読に供したい。

光輝ある伝統■

開祖日真大和尚は、一四四四年に中納言中山親通卿の子として兵庫県豊岡市に生まれ、十二歳出家、叡山三井寺を遊学の後、妙本寺の学室に入り研鑽、四十五歳にして先述の如く一寺を建立するに至る。主要な著述としては、法華経註（文段経）十巻、本迹図形、観心本尊鈔見聞三巻、法華論科註六巻、御書抜書一巻、法華三大部科文三十巻、護持此経論一巻等を挙げることができる。就中、法華経註十巻と法華三大部科文三十巻は文亀三年後柏原天皇の天覧に供すると共に、宮中に招かれて天皇の御前講義をされた由緒ある著である。

また法華経註は別名を文段経と称し、法華経の註書としては、有名な身延の日遠上人（一五一二～一六四二）が慶長十七年に書かれた法華文段経十巻よりも百四十三年も前に書かれたものであることに開祖の学徳を偲ぶことができる。

また開祖上人は学究の人だけでなく地方巡教にもよく出かけられた。

歴祖中では、安土問答に於て、信徒大脇伝内、建部紹智と共に参加し大いに法勲あるも殉死され後七世普傳日門上人、また寛政年間佛像造不に関して妙覚寺五十世日琮上人（一七三三～一八〇三）と共に江戸寺社奉行に出向する往復を日記風に記した「関東下向日記」を残した当山三十世日東上人も忘れてはなるまい。

日東上人はまた華道にも精通された。現在当寺は華道東山未生流の家元として多くの師範、社中を擁し、社会教化活動に力を入れているが日東上人は流祖として仰がれている。

格護している宝物は宗祖御真筆曼荼羅（天目上人授与・立正大学講堂に奉掲されている）朗師、像師の真筆曼荼羅、法華玄論（重文）法華経（重文）十六羅漢絵像（重文）その他五〇〇余点。

本隆寺の文化財価値

関西大学教授　永井　規男

京都の日蓮系寺院は大半が市街地中に営まれている。それは室町時代以来の伝統で、京都町衆によって支持され、町衆の寺として繁栄してきたのである。しかし、反面ではそれが仇となり、市街地には宿命的ともいえる大火に見舞われやすく、伽藍を全焼するといった苦汁を幾度か嘗めなければならなかった。京都の日蓮系寺院に古い建築遺構が少ないのはこのためである。近世京都に起こった大火では、宝永五年、享保十五年、天明八年の大火が有名で、とくに後二者は本隆寺寺地をも巻き込んだものであった。しかし全く奇跡的なことに、当寺の本堂と祖師堂だけは焼けずに残ったのである。その結果この両堂は旧市街地中の日蓮系寺院の中では本圀寺経蔵についで古い遺構になった。旧市街地中では、他宗派の寺院を含めて、その中心伽藍に本隆寺のものに匹敵する古さをもつものは十指に満たないであろう。

本堂は承応三年（一六五四）火災後、第十世真性院日遵上人の尽力で明暦二年（一六五六）春着工、翌年秋に竣工している。正面（柱間）七間、側面七間の本格的な規模、構造をもつ堂であって、近世前期の本山本堂の典型となり得る資格十分である。内陣部は禅宗様、側廻りは和様で構成されるが、全体としてよくまとまり、細部の絵様や彫刻の形もよい。木割が太く風格をもったすぐれた建築である。大工は東山の建仁寺門前に住んだ坂上作左衛門吉貞で、この人は寛永十九年（一六四二）に向日市の南真経寺本堂を建てている。由緒正しい京大工で、加えて、積み重ねられたであろう豊かな経験とがこの本堂に見事に結実している。なお北陸の名刹妙成寺の伽藍は加賀坂上氏を棟梁として建てられたことはつとに知られているが、この坂上氏は京都坂上氏の分流と伝え、福井県鯖江市にある本隆寺末平等会寺の門前に住んでいた。このように本隆寺と大工坂上家との因縁は浅からぬものがある。

祖師堂の歴史は本堂ほど明確でない。本堂より古いという説も以前からあった。子細に見ると新旧の混った建物で、堂の後半部及び小屋組には古い材が用いられている。おそらく古い堂を改造したか、古材を再用して建てられたかしたものである。

屋根瓦には永禄五年（一五六二）の銘をもつものがあり、古材はここまでさかのぼる可能性もあり得よう。京都の日蓮系寺院中では最古の祖師堂遺構であることは間違いない。

正面三間、側面四間、二重屋根寄棟造の建物である。二重屋根とするのは関東の祖師堂にはないが、京都では立本寺や要法寺に類例があり、京都系祖師堂の一タイプとなっていたらしい。なお復原すると本堂も同様であるが、外陣は吹放ちとなる。

本隆寺伽藍の価値はまた、本堂・祖師堂が近世前期のものとしてセットで残っているところにある。日蓮系本山寺院の伽藍配置は、大別してA―本堂と祖師堂とを横並びに配置するもの、B―本堂の前方に祖師堂を斜め向い合せに配置するもの、の二タイプがある。当寺のはAタイプに属するが、この型は関東に多い。しかし関東では祖師堂の方が大きく本堂は二次的なものとなり、京都とは異なる。京都型のAタイプは、近世では本圀寺や妙覚寺でも行なわれていたが、今は見ることが出来ず、僅かに当寺と要法寺において見るだけである。要法寺は本堂・祖師堂とも近世後期の建立になるもので、配置形式はともかく、堂の建築内容にまで至ると本隆寺には一歩を譲る。

こうして私たちは、本隆寺伽藍において、日蓮系寺院伽藍配置の一方の典型を見、また本堂・祖師堂において近世前期の内容、質ともに充実した両堂の典型を見ることができるのである。

本隆寺祖師堂

法華経発祥の地、天竺（インド）霊鷲山の麓に釈尊像を勧請、開眼入仏式をさせていただきました。

インド御霊跡地御参拝の折は是非お立寄り下さい。

インド旅行のお世話は
法華旅行開発がさせていただきます。
東京都台東区上野六―九―十九
〒110　〇三（八三四）二五七六

日親上人第五〇〇年御遠忌
比叡山開創一二〇〇年祭

京都本山めぐりのお泊りは
法華クラブ京都店をご利用ください。
京都駅烏丸中央口正面
〒600　〇七五（三六一）一二五一

法華クラブチェーン店のお申し込みは営業部または最寄の支店が承ります。

ホテル法華クラブチェーン

札幌店	(011)221-2141
函館店	(0138)52-3121
弘前店	(0172)34-3811
仙台店	(0222)24-3121
上野池之端店	(03) 822-3111
上野駅前店	(03) 834-4131
藤沢店	(0466)27-6101
京都店	(075)361-1251
大阪店	(06) 313-3171
境港マリーナホテル	(08594)5-3111
小倉店	(093)531-5531
福岡店	(092)271-3171
大分店	(0975)32-1121
熊本店	(0963)22-5001
鹿児島店	(0992)26-0011
インドラジギール店	

心をつくすホテル
法華クラブ

本　社：京都駅烏丸中央口正面
営業部：東京都台東区池之端2-1-48
電話　03(823)6312

インド法華ホテル仏堂内釈尊像

この御尊像は高祖の御遺勅に鑑みて日本の国土で育った樟木を日本の仏教徒が刻んだものであります。樹齢350～400年、重量1200㎏、高さ２ｍ10㎝　作者・橋本堅太郎

恭賀新春

昭和六十二年丁卯

日蓮宗宗務院

管長　金子日威
宗務総長　長瀬貫公
宗務副総長　加藤海晃
綜合企画部長　冨田義董
庶務部長　神部錬紳
財務部長　浅井玄裕
教務部長　米田淳雄
護法伝道部長　山本龍雄
現代宗教研究所長　長谷川正徳
参与　豊田通證
参与　岡田法順
日蓮宗新聞社社長　豊田英世

〒146 東京都大田区池上一―三二―一五
電話 〇三(七五一)七一八一(代)

法華宗(本門流)宗務院

管長　赤田日崇
宗務総長　松井孝純
教学部長　古田昭翁
教化部長　渡辺修翁
財務部長　中村宏龍

〒170 東京都豊島区北大塚一―二六―四
電話 〇三(九一〇)四七五五

顕本法華宗宗務院

管長　吉田日康
宗務総長　河野時中
宗務次長　山田信正
財務部長　飯澤道宣
布教部長　浜田顕昭
教務部長　平田浄応
社会部長　因幡信篤
庶務部長　朝倉俊幸

〒606 京都府京都市左京区岩倉幡枝町九一一
電話 〇七五(七九一)七一七一

法華宗(陣門流)宗務院

管長　野口日騰
宗務総長　鈴木昭吾
総務部長　牧野琢成
教学部長　土屋善敬
財務部長　田辺信治
教化部長　今井忠良
宗務参事　星川恒雄
宗務参事　都築哲信

〒170 東京都豊島区巣鴨五―三五―六
電話 〇三(九一八)七二九〇

本門佛立宗宗務本庁

講有　西村日地
講尊　小山日幹
宗務総長　長谷川日序
宗務副総長　高須日薫
宗務副総長　大谷薫
宗務本庁役員一同

〒602 京都市上京区御前通一条上ル東堅町二〇番地
電話 〇七五(四六一)一一六六(代)
FAX 〇七五(四六四)五五九九

日蓮本宗宗務院

管長　嘉儀日有
関居　原日認
宗務総長 法務部長　住友顕一
総務部長 教学部長　今村要道
財務部長　丹治義順

〒606 京都市左京区新高倉通孫橋上ル法皇寺町四四八
電話 〇七五(七七一)三三九〇

法華宗(真門流)宗務庁

管長　林日圓
宗務総長　藤井文英
総務部長　長鎌泰信
教学部長　吉田研宏
教化部長　蓑輪渓玉
社会部長　田中寛康
財務部長　小西法明
参与　吉田勝秀
参与　上田浩岳
教学主事　岩崎峻暉
教化主事　笹木研秀
財務主事　小島玄城

〒602 京都市上京区智恵光院通り五辻上ル紋屋町
電話 〇七五(四四一)五七六二

本門法華宗宗務院

管長　永井日輝
宗務総長　吉村信尚
宗務部長　高辺誠亮
総務部長　信隆允忠
財務部長　山下通雄
教務部長　飯田信栄
庶務部長　藤井宏長

〒602 京都市上京区寺ノ内通大宮東入妙蓮寺前町八七五
妙蓮寺
電話 〇七五(四五一)三五二七

宗教法人 国柱会

会長　田中香浦
理事長　加倉井清信
副理事長　中平千三郎
講師　大橋冨士子
講師　大屋敬吉
講師事務局長　大橋邦正
講師法務部長　長井君夫
講師教宣部長　関口宏
教務部長　秋場善彌
必武館副館長　家田仙次
会計部長　大屋統子
組織部長　木村司
総務部長　長瀧光雄
庶務部長　江口和敏

国柱会本部・妙宗大霊廟
〒132 東京都江戸川区一之江六―一九―一八
電話 〇三(六五六)七一一一(代)

日本山妙法寺

首座　上野行量

〒542 大阪市南区南船場一―三―十一
電話 〇六(二六一)三二二六

京都日蓮聖人門下連合会

会長　沖日亨
副会長　赤田日崇
理事長　藤田尚慈
副理事長　岡沢海宣

〈事務所〉
〒600 京都府京都市下京区中堂寺西寺町一
勝光寺
電話 〇七五(八一一)三二九五

恭賀新春

昭和62年丁卯

（順不同）

日蓮宗総本山 **身延山久遠寺**
法主 岩間日勇
総務 望月一靖
役職員一同
〒409-25 山梨県南巨摩郡身延町身延
電話 〇五五六(二)一〇一一

日蓮宗大本山 **池上本門寺**
貫首 金子日威
〒146 東京都大田区池上一―一―一
電話 〇三(七五二)二三三一

顕本法華宗総本山 **妙満寺**
貫首 吉田日康
総務 吉永正晴
執事 木村順静
執事 平田浄應
執事 土持栄孝
執事 三坂岳應
〒606 京都府京都市岩倉幡枝町九一
電話 〇七五(七九一)七一七一

法華宗(陣門流)総本山 **本成寺**
貫首 野口日騰
執事長 真保行宣
執事 笹原壮一
執事 西山英仁
執事 平井良光
執事 佐古弘文
〒955 新潟県三条市西本成寺一―一―二〇
電話 〇二五六(三二)〇〇〇八

法華宗(真門流)総本山 **本隆寺**
貫主 林日圓
執事長 上田浩岳
執事 小島玄城
執事 岩崎峻暉
執事補 笹木研秀
〒602 京都府京都市上京区智恵光院通り五辻上ル紋屋町三三〇
電話 〇七五(四四一)五七六二

本門法華宗大本山 **妙蓮寺**
貫首 佐野日紀
執事長 尾崎日愆
〒602 京都市上京区寺之内通大宮東入妙蓮寺前町八七五
電話 〇七五(四五一)三五一一七

日蓮本宗本山 **要法寺**
貫首 嘉儀日有
関居 原日認
本山執事長 住友顕一
本山執事 今村要道
本山執事 丹治義順
〒606 京都市左京区新高倉通採橋上ル法皇寺町四四八
電話 〇七五(七七一)三三九〇

本門佛立宗本山 **宥清寺**
住職 十八世講有 西村日地
副住職 梶本日裔
事務局長 信徒総代 小倉徳治郎
〒602 京都市上京区一条通七本松西入滝ヶ鼻町一〇〇五―一
電話 〇七五(四六二)四六二〇(代)
FAX 〇七五(四六二)四六五一

立教開宗
出家得度之霊地

日蓮宗大本山 **清澄寺**
別当 塩田義朗
〒299-55 千葉県安房郡天津小湊町清澄
電話 〇四七〇九(四)〇五二五

日蓮宗大本山 **妙顕寺**
貫首 沖日亨
執事長 本山本土寺貫首 山田一光
執事 原光司
執事補 多田妙鳳
〒602 京都府京都市上京区寺ノ内堀川東入
電話 〇七五(四一四)〇八〇八

日蓮大聖人御霊跡
日蓮宗大本山 **本圀寺**
勅諚にて京都に移遷の松葉ヶ谷草庵の霊跡
貫首 水谷日諦
執事長 玉田学雄
〒607 京都府京都市山科区御陵大岩町六
電話 〇七五(五九三)九一九一

日蓮宗大本山 **北山本門寺**
貫首 片山日幹
執事長 田中慈潮
執事 本間正晃
外五名
〒418-01 静岡県富士宮市北山重須
電話 〇五四四(五八)一〇〇四

日蓮宗本山 **岩本実相寺**
貫首 佐久間智周
山務員一同
〒416 静岡県富士市岩本一八四七
電話 〇五四五(六一)〇九〇九

久遠成院日親上人御霊窟
日蓮宗本山 **本法寺**
重文涅槃図長谷川等伯筆
名勝巴の庭本阿弥光悦作
貫首 金山寛成
〒602 京都府京都市上京区小川通寺ノ内上ル
電話 〇七五(四四一)七九九七

公元一九九一年御開山日像菩薩
第六百五十年遠忌奉修
日蓮宗本山 **立本寺**
貫首 細井日苑
〒602 京都府京都市上京区北野一番町一〇七
電話 〇七五(四六一)六五一六

日蓮宗本山 **頂妙寺**
貫首 金子光瑩
執事補 藤井照源
同 川合陽雄
同 二之部知孝
東京執事 田村宏祐
参与 土屋学周
同 新井智清
同 山田完修
〒606 京都府京都市左京区仁王門通川端東入大菊町九六
電話 〇七五(七七一)〇五六二

シリーズ 門連の進路をさぐる 2

門下連合会の質的転換を

日蓮聖人門下連合会相談役
法華宗(陣門流)前宗務総長
水本大岳

日本の独立と立教開宗

昭和二十七年四月、それは日本にとって忘れがたい情熱と興奮を覚えた対日平和条約の調印式が行われた月であり、日本は独立国となった。

戦前派にとって屈辱的だった「オキュパイド・ジャパン」からの解放であり、四つの自由、特に「信教の自由」を得たことであった。

そして戦後の混沌から、新生日本という形をとり始め、しかも奇しくも日蓮門下にとって、立教開宗七百年の聖辰でもあった。

まことに「くらげなす漂える時に、天の沼矛をさして、こをろこをろとかきなして……」と記紀が伝える日本の開展と大変よく似ていた。日本の独立と立教開宗七百年には何か因果関係があったのかも知れない。

更に言えば、門下連合の萌芽はこの時にあったと言っていい。

戦後初の連合

門下各派役員有志の懇談と協議がもたれたのは、開宗会に沸いたその年の秋であった。仮称「門下懇談会」という半ば私的な会合で、私もその末席に列なっていた。

たまたまこの頃は、第二次新興宗教ブームで、懇談会もこのブームにいかに対応すべきか、いろいろ情報交換が行われた結果、少くとも題目系新興教団との連携と交流を保つべきだということになった。そして、各自分担して各教団と接触することになり、私は思親会、仏所護念会、大乗教団、孝道教団と接渉した。

当時、各教団の幹部の方々は非常に謙虚で礼儀正しく、些かの驕りももっていなかった。

約六ヶ教団との接触が進み、交流懇親を深める会合が、年二回程度もたれ、数年続けられた。

私は自地復興のため、昭和三十三年宗務役員を辞するまで、各教団の方々と面識を頂いたことは、貴重な体験となった。

そして私をして宗外のみならず、対社会的に大きく開眼すべく薫陶して下さったのは、他ならぬ村上日宣(恭学)上人であった。

連合の定着

昭和三十四年以降の経過は「門下連合会のあゆみ」年表の示す通りである。

戦後における門下連合の歴史は、種々の起伏を辿りながら、昭和三十八年頃から定着しはじめた。

私も昭和四十五年から新しい門下連合会の一員として渡部公允理事長のもと、斉藤、蓮池、朝倉、田中、木村の各聖とともに門連の拡大推進に協力することとなった。

ある時、門下の有識者が「門下連合は国際連合の形で組織すべきであろう」と話したことがあった。

当時は所謂「国連方式」という連合の形が最良だったかも知れない。

全日本仏教会も、これに倣って宗派加盟と各県仏・市仏の参加を得て「全仏方式」という連合の形をとるに到ったのである。

しかし連合体は実動しなければ、何の意味も特長もない。国際間の損益や宗派間の利害の対立が露出するとき、連合は影がうすくなり、衰弱への道を辿る。逆説すれば、連合は連合することによって弱体化する矛盾を、常にはらんでいるのである。

連合の図式

門下連合もこの方式を意識して、題目系教団の加盟を要請し、また各都市に門連の地方組織を作るべく、主要都市の状況調査を行ったこともあった。

私自身、不受不施派、同講門派、最上教の宗務所を訪れ、連合加盟を要請もし、また京都門連の着実な活動と発展を参考として、札幌、函館仙台、名古屋、広島、福岡等のご門下各聖の意向と、都市門連結成の可能性を調査検討してみたことも、私には懐しい思い出として残っている。

しかしそれぞれ消極的であったり或いは不発に終ったことは、「国連」「全仏」方式の組織が、活動体として無力であることと無関係ではない。

国連の無力化がむしろ国際間の自由交流の気運を促し、学問の世界では、専門フィールドを超える学際的研究の方向を辿り、経済界においてさえベンチャー・ビジネスという現象を生じ、その帰趨が注目されている。

連合の未来

時代の変遷と価値観の推移が、連合というものの質に大きな転換を来しはじめたのである。

門下連合の将来を展望するとき、この点に留意しないと、形式的な連携に陥ってしまう恐れがある。「連合」の内容の質的転換を試みない限り、行き詰まってしまう不安がある。

従来の連合が、単に代表者というトップたちの連合にすぎず、そこで企画されるイベントの推進と実現のために、加盟教宗派が資金分担という結果をもたらし、底辺に浸透することなしに、台風の如く過ぎ去ってゆくのみである。

ならばどうすればいいか。

ここで早急に結論を出すことは難しいし、また緊要な事態が生じている訳でもない。

ただ私は、庶民の信仰の所在を問うことからはじめたい。

現実に庶民の信仰の依拠するところは、宗派にあるのでもなく教庁にあるのでもない。その多くは、本山という実体をもっているもの、本殿という実質の伴ったものに、信仰の所在があるのではないか。宗派、教庁やその連合体に、庶民信仰は依処をあずけることをしないであろう。本山や本殿を抜きにして、庶民の力になる信仰はあり得ないし、またその裏付けなしに発らつとした信仰活動は起り得ないものである。

連合の未来を展望するならば、この視点を中心にした本山、本殿間の交流、連携を計ることを基本とすべきではないか。名目的な連合から、信仰の所在を見つめる質的転回を遂げない限り、門下連合はまたも、空転する恐れが充分にあるのである。

昭和六十一年度 京都理事会開催

地方門下連合組織拡充をめざす!!

恒例の京都理事会は昨秋11月6日顕本法華宗総本山妙満寺にて奉行。

当日の報告・承認・決定事項は、

1、記念講演・古瀬堅徳師。

2、中央・京都門連事業報告。

①中央門連。(イ)身延参詣・理事会5月14日、(ロ)門連だより創刊4月28日

(ハ)人事の件(各派短信参照)。

②京都門連。(イ)降誕会2月15日、(ロ)立教開宗会4月26日。(ハ)夏期大学8月27日。(ニ)御会式10月4日。

3、地方門下組織との連携について。吉永京門連理事長より「大阪日蓮聖人門下懇話会」について、真門流の藤井文英師より福井県鯖江市での門下合同の動きにつき、それぞれ発言。

4、叡山開創一二〇〇年。日蓮宗加藤海晃師より、「天台宗より日蓮宗宛の要請に門連として対処」が提起された。

5、門連だより刊行の件。大橋常任理事より「第2号の内容に沿い、年3回発刊。第3号は62年2月に刊行予定」の報告。

6、分担金値上げに関する件。木村常任理事より「現行5万円を8万円値上げ」が上程され、承認。

7、門下連合会相談役推薦の件。日蓮本宗太田奠壌師が就任。(以上)

◎叡山開創一二〇〇年慶讃法要の件は、12月18日常任理事会で門連として参加の旨正式決定。5月23日法要。

現代人待望の書!
正しい宗教Q&A
田中香浦・編
B6判並製 定価1200円(〒250円)
質問108の構成
第一章 宗教について(1~19)
第二章 教義について(20~38)
第三章 人生について(39~58)
第四章 生活について(59~88)
第五章 社会について(89~108)
●お求めは、もよりの書店か直接本社へお申し込み下さい。
●「出版案内」をご請求下さい。
宗教法人 国柱会
出版局 真世界社
〒132 東京都江戸川区一之江6-19-18
電話 03(656)7111(代)
郵便振替 東京5-19556

妙法蓮華経 一部八巻 刊行
法華経を信奉する全宗派、全ご寺院、全檀信徒の皆さまにお勧めします。
お経本は巻帙入り、タテ22センチ、ヨコ8センチ(一巻)で、本紙に本コウゾを用い、金蘭表装(緋金、茶金)をほどこした豪華本です。
予約募集大好評につき
五月三十一日までの申し込みに限り
刊行記念特価 三万五千円(送料別)
お申し込みは 日蓮宗新聞社
東京都大田区池上三-十六-九
〒146 ☎(〇三)七五五-五二七一
自我得佛來 所經諸劫數 無數億衆生 常說法教化
(上は、実物大文字見本)

各派・教団 短信

【日蓮宗】◈立正大学名誉教授久保田正文師の本葬が10月1日東京仙寿院に於て、立正大学学園葬として執行された。

◈勧学院では毎月1回宗務院を会場として「勧学会」を開催しているが六十一年度の実施は次のとうり。5月16日、6月20日、7月18日、9月19日の4回は茂田井教亨勧学院長の連講で、講題は3回を「御本尊について（一般的概念・日蓮聖人の場合等）」、4回目は「本尊問答抄」について、10月17日は浅井円道講学職が「一念三千」を、11月21日は中野文海講学職が「宗教書ブームと宗教離れについて」、12月19日は勝呂信静講学職が「法華経の成立問題と思想」を講じた。1月16日は茂田井教亨勧学院長、2月20日は上田本昌講学職が担当。

◈日蓮宗加行所入所式　於中山法華経寺・加行僧205名（11月1日）。

◈中山法華経寺聖教殿お風入れ（11月3日）

◈日蓮宗綜合財団賞選考委員会が11月14日宗務院で開催され、教学部門宮崎英修、社会教化部門奥邨学進・加賀美日聰各師を選考、授賞を決定した。

◈11月19日、池上本門寺に於て宗門先師法要（139霊位）が金子管長猊下導師にて厳修され、遺族200余名、長瀬宗務総長以下内局部長参与、審査会、所長代表が参列し先師を偲んだ。

◈同日勧学院学階授与式が宗務院で行われ、金子管長猊下より勧学6名講学37名、嗣学17名に学階が授与された。

◈立正大学名誉教授、身延山短大学頭宮崎英修師の勲四等叙勲祝賀会が12月10日品川のホテルパシフィックで開催され、管長猊下・宗務総長等宗門関係、大学・身延山関係者等多数が集い、功労を讃えた。

◈お題目総弘通運動推進の広宣活動として本年護法伝道部では電通に依頼、シンボルマークと標語を作成した。標語は

△いのち、不思議
△こころの陽だまり

シンボルマークは日蓮聖人の御名をシンボル化して、太陽と蓮の花をイメージした。三枚の蓮の葉は三界を表現し、三界を貫く実乗の一善を太陽の光によって表したもの。（左図）

合掌で光を
日　蓮　宗

◈右の標語と総弘通運動の趣旨など、サンデー毎日、週刊女性、毎日新聞に四月・五月・八月・十月に広告掲載を行った。（富川孝恭）

【国柱会】◈11月16・17日、国柱会本部で恩師田中智学先生第48回忌報恩大会が全国同志参集して開会。

◈11月15・16日、本部で国柱会定例協議員会が開会された。会長推戴の件では現田中香浦会長が再任。新年度事業計画に関する件では真世界運動の展開ほかが決議された。昭和63年は田中智学先生第50回忌を迎え報恩記念事業が企画され、都内デパートにおける展示会など8項目にわたる事業内容が発表された。また同年は妙宗大霊廟の創建60周年に当り結縁運動の展開を決定。（秋場善弥）

【顕本法華宗】◈三派統合学院開催さる。去る12月5日、東部連合会（関東教区寺院交流団体）の主催により僧員講習会が、千葉市本行寺を会場に開催された。当日、特別講師として立正大学仏教学部教授伊藤瑞叡先生を招請し、「妙法―サッダルマとは何か」のテーマのもと聴講した。（朝倉俊幸）

【日蓮本宗】◈日蓮本宗本山要法寺（京都市左京区東山三条西入る）では本堂大屋根の全面修復を行うことになり、このほど成満に向けて浄財の勧募運動が開始された。

同本山の本堂は安永3年（一七七四）、第三十世日良上人の代に落成しており、212年を経過していることになる。発起から落成まで四代の歴世と35ヵ年の歳月をかけており、総欅造りの堅牢な建築であるが、用材の欅は島根県三瓶山から伐り出し日本海―関門海峡―瀬戸内海を海運し、大阪湾からイカダに組んで淀川―高瀬川をのぼって搬入したという。

本年6月に着工、約15ヵ月の工期を経て昭和63年8月末に完工の予定である。総予算は三億八千万円。（柳下義真）

【法華宗真門流】◈本紙第二号に既報「総本山本隆寺開創五百年記念慶讃事業」の大要は、

1、大法要の厳修
　昭和63年4月8日より3日間にわたり、報恩と慶讃の法要を執行する。
2、日蓮大聖人御本尊の復刻
　大聖人天目上人授与の御本尊を完全復刻し限定頒布する。
3、御開山御真筆本尊集の発行
　各寺院・檀徒に格護されている御開山日真大和尚御真筆の御本尊を集大成する。
4、展示・収蔵棟の新築
　昭和62年に完成し、寺宝・文化財を展示し、檀信徒の信仰増進をはかる。
5、その他
　・法華経一部八巻読誦カセットの作成
　・荘厳具修繕と営繕個所の完成
　・開創関係出版物の発刊

以上、今、鋭意僧俗一体となって、その達成に精進を続けている。（吉田勝秀）

【法華宗陣門流】◈12月10・11日の両日法華宗宗務院に於いて、昭和61年度新住職者・学生沙弥合同研修会が開催された。各講師により宗法・法要式の解説、宗門史、布教方法の実践等講義をされた。新住職者には法話実習を行ない、6年以内に3回の受講が義務づけられている。（江坂隆俊）

【本門法華宗】◈同宗では日隆聖人御生誕六百年慶讃事業の一環としてかねてよりその完成が待たれていた『信徒要典』が昨年11月15日発刊された。

この『信徒要典』は、増田宏雄前宗務総長が編集委員長となり、法華経略解説、日蓮聖人御遺文、日隆聖人御聖教、信者の心得などが網羅されている檀信徒向けの教本である。（持地光学）

【日本山妙法寺】◈藤井日達上人（行勝院日達）の第三回忌法要が1月9日、日本山妙法寺清澄山道場で厳修された。

【法華宗（本門流）】◈法華宗布教師会昭和61年度総会及び研修会が、去る昭和61年1月17・18・19日の3日間、尼崎市大本山本興寺において開催された。今回は特別に宗外講師として松原泰道先生を迎え、「初心者のための布教心得」と題して講義を賜り、会場は満員の盛況であった。次回の会場は京都市大本山本能寺を予定。

◈去る昭和61年12月8日より12日まで、沼津市大本山光長寺において青年伝道隊第5期隊員養成第1次特別訓練が行われた。今回の募集は7年ぶりとあって、全国から28名の志願があり、宗内外の講師先生の講義の他、沼津駅前において伝道布教の実習が行われた。この模様はTV・新聞を通して各方面に報道された。第2次特別訓練は、2月20日より25日まで京都市大本山本能寺において開催され、この錬成を修了すると日隆聖人御開山忌において、赤田管長猊下より辞令が交付され、伝道隊員として各地で伝道活動を開始する。（矢吹慈英）

【本門佛立宗】◈昭和62年度は「開導にかえれ・自力を捨て経力に付く改良を」という内容の宗務方針が発表された。

本年は、佛立開導日扇聖人百回御遠諱を、2年後という間近に控えていよいよ教講一体の具体的報恩行に邁進している。先づ昨年9月に「開導百遠諱特別局」が設置され、法要部・記念事業部・推進部・事務文書部と四部門に分れて、報恩事業の詳細が進められている。次に教務局は記念事業として「佛立辞典」の編纂と佛立修学塾の充実・教育体系の再確立を。弘通局では、教化誓願者増加運動を柱に、その手助けとして「現代宗教早わかり問答集」や結縁パンフレットの発行で弘通広宣の援護を計るとの事。広報局は、次のような開導百遠諱記念シンボルマークを決定し、宗門の報恩行の意識昂揚をめざしている。

開導百遠諱

シンボルマークは、百遠諱の百を図案化したもので、1の太い直線の柱は、佛立宗の教えと伝統をタテに表わし、00の部分は未来に向けて跳躍する宗門の弘通を表わしている。（デザインは、前橋本勝寺信徒の三浦修氏による）（深沢泉奥）

本紙編集委員自己紹介(2)

江坂　隆俊（法華宗陣門流）

日蓮聖人門下連合会「門連だより」の機関紙を刊行することは、誠に意義深いものであります。七百御遠忌事業「門下青年の船」の一要員として参加協力できました事は、生涯忘れ難く楽しい有意義な教訓を得ました。

今般編集に携わるに際し、もとより浅学菲才の者でありますが、諸先輩各位の御指導を仰ぎ、努力精進致す所存であります。

矢吹　慈英（法華宗本門流）

今般、教団からの推薦により本紙の編集委員に名を列ね、末席を汚すこととなりました。

小職が門下連合会の仕事をお手伝いさせていただくことは初めてです。勿論、宗祖日蓮大聖人第七百遠忌を記念して実施された「青年の船」等の催しへも不参加であり、また他の編集委員各師と比べても若輩であるため、いささか不安と戸惑いを感じております。

しかし乍ら、編集作業に関しては惜しみない努力を傾注する所存です。

深沢　泉奥（本門佛立宗）

ありがとうございます。不肖未熟者の小僧が、高祖日蓮大士七百回御遠諱という希なる御縁に出会わせて頂き、更に縁が重なり出会が拡がって、門下連合の活動を知り、青年の船に参加させて頂いたことで、今度、「門連だより」の編集員というお役を御奉公させて頂くことになりました。

つきましては、全くの素人ゆえ、種々と他の委員の方にご迷惑をかけるものと思いますが、何とぞ宜敷くご指導の程、御願い申し上げます。

青年の船を通じ、その後の交流の中で感じます事は、それぞれの方が皆、それぞれの導き因縁をもって妙法のご信心に出会い、各々の立場で妙法弘通に心がけておられること。特に門連役員諸氏、とり分け青年の船で出会った若き世代各位の思いは、小さな自己のカラに閉じこもっているのではなく「お祖師様日蓮聖人のみ教え・上行所伝の妙法を、いかに外に向かって日本国中に、いや全世界に知らしめ拡めるか」という一点であることが確かめられております。

この門連だよりが、そのような意味で少しでも活用されるよう、編集員の一人として努力していきたいと思っております。

吉田　勝秀（法華宗真門流）

日蓮聖人門下連合会創立二十五周年を期して、昭和六十一年四月「門連だより」の発刊がなされました。宗門を代表して、その編集委員の委嘱をうけました。

日蓮聖人門下連合会の目的達成のため、各派教団の特性を生かし、各派教団の連帯と協力の輪の柱になる重要な機関紙であることを自覚して精進を続けてまいります。

るつうぶん

＊第三号の一面は、地方門連の現状報道として京都門連の活動につきレポートを吉永理事長（当時）にお願いした。京都方式と呼ばれそうな連合システムは今後の地方門連組織結成には大変参考になるであろう。

＊真門流本山本隆寺の沿革と現状、大変興味深いものである。

＊「門連の進路」今号は水本大岳師に登場願った。師の指摘される論点は、まさに今後の門連活動のキーポイントである。次号では、師の提案をうけ、議論を展開させたいと考えている。

＊第二号はおおむね好評をいただいた。より一層の充実を目指し編集委員一同頑張りたい。

＊「従地涌出」欄を今号より新設しました。

日蓮聖人門下連合会

●目的

本会は日蓮聖人の理想を実現するため、祖廟を中心として門下各派及び教団並びに地方門下連合会の連絡、協力、団結を強化することを目的とする。

●事業

本会は前条の目的を達成するため、左の事業を行う。

1、祖廟護持の組織強化
2、教育事業の提携
3、布教の連合教化
4、懇談会・研究会・講演会等の開催
5、各種出版物の刊行
6、海外布教の提携及び交流
7、対外的な各種の運動
8、その他

●加盟団体

日蓮宗　法華宗本門流
顕本法華宗　法華宗陣門流
本門佛立宗　日蓮本宗
法華宗真門流　本門法華宗
国柱会　日本山妙法寺
京都門下連合会